

大江健三郎『個人的な体験』論

——「赤んぼう」と『救済』

鈴木 恵 美

はじめに

大江健三郎の代表作の一つである『個人的な体験』（新潮社、一九六四・八）は、前年の著者の長男誕生を契機として書かれた最初の小説『空の怪物アグイー』（『新潮』一九六四・一）の後に書き下ろされた長篇であり、従来私小説と位置付けられてきた。

先行研究では、前掲書の箱に印刷されている評に平野謙が「最近の現代文学全体の輝かしい傑作」と「確信」したとあり、安部公房が「世間の禁止に大胆な挑戦をこころみた」と記しているように、発表直後から高い評価を確立してきた。しかし、「第一一回新潮文学賞受賞時 選評」（『新潮』一九六五・二）においては七人の選考委員の大半が結末に対する批判を表明した。河盛好蔵は「結末には飛躍、もしくは腰くだけがあつて、破綻を示している」原因が、「小説技術にかかわる問題ではなくて、作者の本質につながる問題」だと述べた。亀井勝一郎は、「大江氏の宗教的あるいは道德的怠慢ぶりが露出している」ことを「まことに遺憾」であるとして作者の文学的姿勢を辛辣に批判し、中島健蔵も本小説が道德小説である以上この結末に「文学的には意味がない」と切り捨てた。このような批

判が出た要因は、既に三島由紀夫（『週刊読書人』一九六四・九・一四）が、「暗いシナリオに『明るい未来を与えなくちゃいかんよ』と命令する映画会社の重役みたいなものが氏の心に住んでいるのではあるまいか？ これはもつと強烈な自由を求めながら実は主人持ちの文学ではないだろうか？」と述べて、『個人的な体験』を芸術小説ではなく道德小説と捉えたことがあげられよう。これら同時代評は全て、脳障害があるとされた「赤んぼう」が、手術後に誤診とわかり恢復・退院するという結末が、父親である作者自身の願いを描いたものであり、小説としての文学性や芸術性が足りないということとで作者の文学的姿勢を非難している。

また江藤淳・大岡昇平・河盛好蔵・白井浩司・中村光夫による座談会「外国文学の毒」（『新潮』一九六五・一二）において、江藤は『個人的な体験』はアメリカ小説です」と語って主題の独自性を否定し、さらに大江との対談「現代の文学者と社会」（『群像』一九六五・三）でも、『個人的な体験』では著者が「文学者の社会的責任」を逃れていると批判した。同対談での大江は、サルトルの「自由」について強く言及した後で、「本質的に、あの小説は青年の態度決定の意味において社会にかかわっている。すなわち主題を確認して

ただければ、いちばん最後がどうなろうと、あの小説の主題そのものは決して社会に対してちがった存在となるものではない」と反論し、主題が、サルトルの「自由」の捉え方と深く関わっていることを明らかにして、再読を要請している。しかし今尚、作品評価は非常に高いにも拘わらず、結末部分に批判が集中したことへの著者の意向に即した形で再検討はされていないのである。

そこで本稿では、サルトルの思想を視野に入れてテクストを読み進め、まず鳥の人物像、かれと「赤んぼう」及び妻や家族との関係性を明らかにする。次に、火見子の人物像や鳥と火見子との関係性について検証し、「赤んぼう」が二人に与えた影響について考察する。さらに、本テクストは従来言われてきたような鳥が火見子の「アフリカ」行きを誘惑を拒絶して自己救済を果たした物語ではなく、「赤んぼう」が二人を《救済》する物語であることを明らかにして、結末が妥当であることを確認し、最終的には『個人的な体験』の文学的価値を定めて大江文学全体に位置付けたい。

一 鳥の自己崩壊

小説は、主人公の鳥が、大学院時代に学生結婚した妻が難産で苦しんでいるのを、書店から「一時間ごとに電話をかけて」安否を気遣いながら、「アフリカ」の地図を眺めることに熱中している場面から始まる。本章では、まずこのような鳥の「アフリカ」願望について考えたい。結婚直後から「アルコール」に逃げ込んで廃人寸前に陥った鳥は、常々「アフリカ」冒険旅行の夢があった。そのため鳥は「赤んぼう」について、「いったん妻が出産し、おれが家族の檻にとじこめられたなら、(略)生まれてくる子供がその蓋をガ

チリとおろしてしまふわけだ。おれはもうアフリカへひとり旅に出ることなどまったく不可能になる」と思い、自身の夢の実現を妨げる邪魔者と考えている。ところが鳥は、「アフリカ」旅行に必要な「重要な実用地図」を購入するが、会計の時にはもう「つまらない買物をしている」と感じる。そして全く別の「陳列棚のなかの贅沢な地図」という「給料の五箇月分にあたる」、過去の冒険家が使用した観賞用地図に描かれた「アフリカ」に執着する。このような「アフリカ」への憧憬が不安定に立ち現れる鳥の葛藤は、かれが、愛する妻と「赤んぼう」との日常生活を望みながらもそこから逃避したいと願っている人物であることを意味している。そしてその夜、「竜の刺繍のジャンパーを着こんだ若者たち」に襲撃された時に、「鳥は決意した」。

鳥は自分の体と土手の斜面のあいだで、アフリカの地図が皺だらけになっているにちがいないと考えた。そしていま自分の子供が生れつつある、という考えもまた、かつてない切実さで鳥の意識の最前線におどりでた。不意の怒りと荒あらしい絶望感が鳥をおそった。それまでかれは驚愕し、困惑したあげく、ひたすら逃げだす工夫をしていたのだ。しかし、鳥は逃げようとは思わなかった。もし、いま闘わなければ、おれのアフリカ旅行のチャンスは永遠にうしなわれるばかりか、おれの子供は最悪の生涯をすごすためにのみ生れてくることになるだろう。鳥は靈感のごときものにうたれてそのように信じた。

「I」

やっと父親になる決心をした鳥は、「妻の陣痛がはじまって以来はじめて上機嫌だった」ほどの喜びを感じる。

帰宅後すぐに、購入した「アフリカ」の実用地図を、夫婦の寝室の壁の下に画鋏でとめて、ぐっすりと眠りに入った鳥は、夢の中で猛獣である「ファコヘールの凶まがしい歯が鳥の踝を鋭く確実にとらえ」て殺されるという「辛い夢」を見る。夢の中で鳥は、どうしても「ファコヘール」の日本語名を思い出せないといながら、しかし目覚めた瞬間には、「イボ猪だ」と思い出す。「イボ猪」は、「アフリカ」の草原に生息する草食動物で、大きく伸びている牙は攻撃には全く使用されない。現実の鳥に致命傷を与えることはない「イボ猪」が、夢の中の「アフリカ」では猛獣となつてかれを殺すのは、鳥が再び迷いはじめたことを意味する。

夜明けになって、妻の入院先から緊急の電話があり、鳥は、「赤ちゃんに異常」があることを知らされる。「至急」来て欲しいという連絡を受けて病院に駆けつけた鳥は、大学病院に「赤んぼう」を搬送するために救急車に乗る。脳外科の専門医の診断を受けるためである。かれは、父親としての「責任」を負う生き方を選ぶかどうか「フィフティ・フィフティ」の葛藤を抱えていた上に、障害を抱える「赤んぼう」との「生活」に「束縛」される恐怖を味わう。

そして「赤んぼう」を「怪物」と思い込んでしまう。

一方、妻は「赤んぼう」の誕生に、破綻した結婚生活の再生を期待していた。彼女は鳥に、「あなたは自分を犠牲にしても赤んぼうのために責任をとってくれるタイプ？」と問う。かつて鳥を慕う菊比古という「年少の友人」が、「ぶらぶらしている若者」は「強制的に」アメリカ兵によって朝鮮戦争に連れて行かれるという噂を聞

き、そのような目に遭いたくないと考えて、CIE（筆者注——GHQに置かれて、教育・宗教・マスコミなどの改革を担当した民間情報教育局）の同性愛者のアメリカ人の情人になった。そのことを鳥が暴露し、「鳥、おれは恐かったんだよ！」と釈明する菊比古をかれは見捨てた。そのような鳥の過去を知っている妻は、出産した病室に駆けつけた鳥に、「誰か弱い者を、その人にとっていちばん大切な時に見棄ててしまうタイプ」かと問う。そして「男の子なら菊比古という名前」にしたいと告げる。それに対して「沈黙」した鳥は、内心で妻のことを「熱い敵意にみち」ていると考える。さらに妻は、「あなたが、赤んぼうを見殺しにしたら、わたしは、あなたと離婚するだろうと思うわ、鳥」といって、かれに父親としての「責任」を果たすように要求した。鳥は、「離婚」の選択肢を突きつける妻に、「赤んぼうは死にはしないよ」と「幾重にも口惜しい思い」でいう。妻が自分を「信頼」していないことを感じているからである。同時に妻の言葉を理不尽な暴力だとも感じている。

しかし妻が、「赤んぼう」の誕生を契機として、鳥を追いつめるのは鳥に父親としての「責任」を果たしてほしいからだ。しかしかれは「赤んぼう」が家族を危機に陥れる「怪物」だと思い込んでおり、かれの自己執着・現実逃避・「責任」回避という行為が、実は家族を苦悩させている問題であるとは気づかない。

二 鳥と火見子の自己救済

妻の異常出産の後、鳥は大学時代からの女友達・火見子の元に逃げ込む。彼女は、大学卒業まぎわに大学院の学生と結婚し、その一年後に夫に自殺されてしまったという過去があり、その原因は、彼

女が「常軌を逸脱した性的冒険家」ゆえだと噂されている。火見子は、「妊娠という言葉の毒に当たった」と性的不能を訴える鳥を、肛門性交に誘う。ためらう鳥に彼女は、「わたしはどんな性交にも、なにかしら genuine なものをみつけたことができます」という。英語教師である鳥は、「genuine」が「純種の、本物の、(略)」という意味だと解して、彼女の誘惑を受け入れる。かれは、性行為を持った後に自信を回復し、彼女を「性のエキスパート」だと賞賛して、二人が救済されたと思う。しかし異常な性行為の後、鳥は火見子の自殺した夫と自分を同一視して、「おれは死んだ青年だ」と思う。「死んだ青年」とは自殺した火見子の夫である。火見子は、「わたしの夫は、そのように感じはじめてすぐ自殺したのよ」、「もしあなたまでもこの寝室で首をくくることがなれば、わたしは自分を魔女みたいに感じると思うわ、鳥」という。彼女は夫を自殺させたという罪悪感から、「性交」によって、死んだ夫のようなタイプの男性を救うことで自己満足を得ていたのである。彼女自身は聖女だと思ひ込んでいる。しかし鳥夫妻が「性交のたびに憂鬱な心理的いざござをくりかえした」原因は、かれの「妊娠後の責任を登録しながら性交する」こと、すなわち父親になる「責任」を回避していたからである。鳥が火見子のところに逃げ込んでも一時的な逃避にはなるが、本質的な解決にはなっていないのである。

鳥は、学生時代に酔った勢いを借りて彼女を強姦し処女を奪った「暴行事件」を起こしていたが、かれは火見子への暴行を「正確に記憶」していないという。しかし酒の勢いを「悪用」したと語っていることで、罪悪感は抱いている。鳥は、「風土記逸文の肥後国から採った」神話的な名前を持つ火見子について、性に奔放すぎるし、

モラルに頓着しないという意味で、「怪物」・「日常生活について致命的に不適格」だと酷評する。鳥は「モラル」が何かをわかっている人間なのだ。しかし実際の鳥は、今また彼女と不倫の「性交」をしており、「赤んぼう」の元へも出向かない。鳥がことさらに火見子を非難するのは、自己批判のすり替えであり、すなわち自己欺瞞の行為だ。

そして二人はさらに妄想を深めていく。自殺した夫への罪悪感から狂気に陥った彼女は鳥に、「わたしたちの手」で、かつて自身の胎児の「中絶のために知り合った」「友達の医者」に渡して、「赤んぼう」を「神の(犠牲の小羊)」として殺害し、二人で「アフリカ」へ逃げるという計画を語る。嬉々としている火見子とは対照的に鳥は、「現実には眼の前にあるアフリカ!」には「熱情をそそらない」し、そのような「自由」は「とくに嬉しくないよ」と嘆く。かれは「赤んぼう」への罪悪感を感じている。二人は、死を招く危険のある組み合わせの「麦酒と睡眠薬」を過剰に「必要」とする「欲求」を持つ。異常な「性交」・「麦酒と睡眠薬」がエスカレートした先には、二人の「アフリカ」行きが、「暴力的な変死の印象」しかないことを予感させる。

三 「赤んぼう」による救済

元々は父親の鳥が、救急搬送された「赤んぼう」に付き添って、入院手続きをした。ところが専門医に「赤んぼう」が手術で回復する可能性を告げられた鳥は、手術を断ってしまう。「怪物」の妄想から逃亡したい鳥は、現実の思わぬ展開にパニック状態になり、「赤んぼう」を物のように「持って帰る」と火見子に告げる。「赤んぼう」

を連れ出す時に、入院手続きで収めた「保証金」が「ほぼ手つかずのまま」戻って来た理由もわからない。このときの鳥は自らを「錯綜して未分化な気分のまま自分がなにをいたがっているのかはつきりわからない」というほどの混乱に陥っている。そして自身の行動についても、「嬰兒殺し容疑」で「逮捕される」し、それを報道する「おぞましい新聞記事を思いえがいた」。これらは鳥の良心の呵責が生んだ罪悪感や脅迫観念による妄想に過ぎない。

鳥と火見子は、「赤んぼう」の誕生直後に「赤んぼうが生まれたんだけど、すぐ死んだのさ」、「鳥のところでもそうなの? (略) 放射能の灰で汚れた雨の影響じゃない?」という会話をし、核戦争の恐怖を語り合っている。そして「赤んぼう」の畸形が放射能の影響だと決めつけて、手術の決断をしないまま、「赤んぼう」の衰弱死の連絡を待ち続けていた。それは父親としての「責任」に直面しなくなっていたからだ。

妄想に生きているようだが、鳥は、「赤んぼう」を退院させる時によりやくふと「妻の言葉を思い出して」、「菊比古」という名前を「赤んぼう」に名付けていた。それは、「名前をつけないままの死と、つけたあとの死とは、おれにとってあいつの存在自体がちがつてくるだろう」と考えたからだった。そして「赤んぼう」を閨医者の手に残けた後に、自分が見捨てた「赤んぼう」の姿をかつての菊比古とだぶらせた鳥は、「今夜はゲイ・バー《菊比古》でずっと飲んでいよう、お通夜だ」と感傷的にいう。生きている「赤んぼう」を死者にして弔うのだ。鳥は「死にももの狂い」で「怪物」から逃げることを「おれの生涯で最大の欺瞞」と自覚しているために、「記憶」の「修正」が上手くない。鳥の混乱はもはや極限

に達している。「現在もなお、鳥は他人どもの時間圏に復帰していない」、「鳥たちは時間にめぐりあうことができない」のは、二人が完全に《菊比古》という妄想世界・狂気に陥っていることを意味している。

ところが、かねてから核の恐怖に脅えていた鳥だが、「赤んぼう」を見殺しにした後に、火見子が「鳥、原水協はソヴィエトの核実験に屈服したのね」と言った時にはなぜか無関心となる。かれが現実の核反対運動に急速に「熱意」を失ったのは、人道的活動をしているはずの自分のなかに、「赤んぼう」殺しを自覚したからである。

目の前の現実の困難に対応するためには、妻や「赤んぼう」のために「責任」ある行動をすべきであったが、火見子のところに逃げ込んでしまった。そして、「性交」し「アフリカ」に行くことを夢見る。鳥は自分のなかに、現実逃避の数々を自覚する。かれが自覚した「黒い心」とは、エゴイズムのために「赤んぼう」を見殺しにする心である。

そのことに鳥が気づいた瞬間、突然「赤んぼう」は、「信じがたいほどの大声」で「泣き喚きはじめた」。

赤んぼうは、頭の瘤にかぶせられた仔山羊の模様の帽子をびくびく震わせて、アイ、アイ、アイ、イヤー、イヤー、イヤー、イエー、イエ、イエ、イエーと泣き喚きつづけた。

[12]

二人は、「赤んぼう」の生存への希求の強さに内心では脅かされる。二人は、閨医者に辿り着く前に、「睡眠薬」の効果で眠気が激しく、事故を起こして死ぬ予感に恐怖する。さらに、鳥たちの不審な

外観の車は警官に制止された。二人は嬰兒誘拐の罪で逮捕される恐怖も味わう。だが一方で雨が降った時に、鳥は「この車に屋根はつけられるのかい？ そうしないと赤んぼうが濡れてしまう」と氣遣いを見せ、「怪物」が弱い「赤んぼう」であることを自覚している。

「肺炎をおこしかけている」「赤んぼう」を闇医者に託した後、二人は、『菊比古』という酒場に向かう。そこで再会した「年少の友人」であった菊比古は、「狂人の救助は無意味だった」という鳥に対して、「無意味な噂」に「かりたてられていろんなことをしてしまったんだから」と釈明する。また、勇敢な生き方をするかどうかでその後の人生が全く異なるとも語る。そして自身の転落の原因となった「ホモ・セクシャル」については、「わたし自身がそれを選んだのだから、責任は他の誰にもないよ」という。その言葉を聞いた火見子は、「菊比古はフランスの実存主義者の言葉も知っているのね」という。フランスの実存主義者とはサルトルのことであるが、鳥の前に立った菊比古は、サルトルの「自由」と「責任」の思想について正確に語っている。だがその直後に鳥に拒否反応・異変が起きる。

そこで鳥は、その永かった一日の、最初のウイスキーをひと息に飲みほした。数秒後、突然に、かれの体の奥底で、なにかじつに堅固で巨大なものがむっくり起きあがった。鳥はいま胃に流しこんだばかりのウイスキーをいささかの抵抗もなしに吐いた（傍線部引用者、以下同じ）。

「じつに堅固で巨大なもの」とは何か。それは「赤んぼう」の存

在である。生きた「赤んぼう」だ。「赤んぼう」は人間として「未分化」のままであり、自身の「自由・責任」・「束縛」など選べない。自身では何も選択出来ない例外的存在だ。「赤んぼう」は鳥の新しい一部であり、「赤んぼう」を殺すことは、他殺ではない、自殺に等しい行為である。そのことを悟った鳥は、火見子が逮捕されるだろうと告げても、「ばくは逮捕されてしかるべきだ。ばくは責任をとるだろう」という。かれは、「赤んぼう」に対しての「責任」と一体化した自身の「責任」をようやく自覚した。だから「赤んぼう」との共生を自らの新しい生き方としたのである。

鳥が「正統的」に生き方を改めたことで、「ヒステリー質の危機」を「確実」にのりこえた火見子も、「アフリカ」に行つて再生するという、新しい生き方を選ぶ。「ありがとう」と鳥が「火見子にも菊比古にもとなく素直に感情をこめていった」のは、不可思議な存在によって、生き方が定まったことへの感謝の表現である。

かれがひろったタクシーは雨に濡れた舗道をすさまじい速度で疾走した。もし、おれがいま赤んぼうを救いだすまゝに事故死すれば、おれのこれまでの二十七年の生活はすべて無意味になつてしまふ、と鳥は考えた。かつてあじわったことのない深甚な恐怖感が鳥をとらえた。

息子を育てるために、父親の自分が死ぬことが出来ないという現実を初めて実感した鳥は、再び生きる「熱情」に満ちる。

『個人的な体験』は、人生の避けられない不条理を体験した主人公が、未来を生きるだろう存在である「赤んぼう」との人生を選び

取る過程を神秘的に描いているが、現実的な物語である。また『個人的な体験』という表題は、主人公の鳥の〈新生〉を意味しているのではなく、全ての個人が体験する普遍的な主題だと気付かせる意図がある。

最後に、従来はサルトルの思想が唐突に入ると批判されてきた部分が、逆に妥当であることを明らかにしたい。

「いや、ぼくはたびたび逃げだそうとしました。ほとんど逃げだしてしまひそうだったんです」と鳥はいった、それから思わず怨めしさをおしころしたような声になりながら、「しかし、この現実生活を生きているということは、結局、正統的に生きるべく強制されることのようにです。欺瞞の罠におちこむつもりでいても、いつのまにか、それを拒むはかなくなってしまう、そういう風ですね」「そのようにはなく現実生活を生きることもできるよ、鳥。欺瞞から、欺瞞へとカエル跳びして死ぬまでやっていく人間もいる」と教授はいった。

【* *】

従来、冒頭で鳥を襲った連中がかれに気づかないことを含めて、『* *』の記号の付いた章は、「唐突」かつ宗教的に安易とされてきた。だがこの結末は、鳥が「赤んぼう」の誕生直後に直観的に決めていたことを、様々な意識内葛藤の末に、再び主体的に選ぶことの意義を訴えている。

サルトルは自己欺瞞が人間に不可避の現象とする。しかし、自己欺瞞からの脱出の可能性について、「本来性 authenticité の回復」という言葉を原註に一箇所だけ記している。サルトルは、意識の構

造を探索した結果、自己欺瞞からの超越は不可能であるという結論に達しながら、他方、本来性の回復の〈希望〉は書き残していた。したがって結末の鳥の悟りは、サルトルの思想ではない。「赤んぼう」によって鳥が獲得した新しい生き方であり、この鳥の新しい世界認識は、彼の本質が変容した〈新生〉後の世界認識を表現したことを意味している。はじめに述べた大江の反論は、サルトル受容の内実を検証してはじめて、真に理解され得るものであったのだ。

ところで救済者である「赤んぼう」が、知的ではない可能性を秘めてテキストが閉じられることに注目したい。それはサルトルが自己欺瞞を起こさない人間は知的ではないと定義するからである。『個人的な体験』の救済者には一定の限界が認められるが、人間として未分化の状態にある「赤んぼう」は、大江文学における最初の現実を生きる救済者の誕生を意味している。「赤んぼう」は、人間に本来存在する良心に作用して本質を変容させる、隠れた主人公ともいふべき重要な存在である。主題は、「赤んぼう」が、鳥と火見子の二人を《救済》したことにあると言えよう。

おわりに

『個人的な体験』は、主人公の鳥が自己崩壊をきたす「アフリカ」への現実逃避を止めて、脳ヘルニアと診断された「赤んぼう」に象徴される他者と関わることを通して、社会的な「責任」を果たす成熟した人間に変容する軌跡を描いている。火見子は、自殺した夫に対する罪悪感のために、「性」を用いていた女性であった。火見子に誘惑された鳥は、彼女が中絶した胎児同様に「赤んぼう」を殺して、「アフリカ」へ逃亡し、生き直すことを企てる。しかし自身の

なかにある「黒い心」に気づいて、「赤んぼう」の存在が自分の一部であることを悟った鳥は、彼女の誘いを拒絶して、「赤んぼう」との共生を決意する。火見子は、「アフリカ」に行くことで人生をやり直す可能性を得た。『個人的な体験』は従来、鳥が火見子の誘惑を拒絶し、「赤んぼう」を救済した物語とされてきた。しかし検証の結果、「アフリカ」に逃亡すれば死が待っていた二人の生命が、「赤んぼう」によって逆に『救済』され、新しい価値を付与される物語であることがわかった。主題は、父親として生きる決心を直観的にしていた鳥が、「赤んぼう」の介在によって、現実を「正統的」倫理的に生きることを主体的に選択したことにある。また、その変化後の世界認識を描く意図があった結末部分の妥当性も見出せる。このような本テクストは、私小説ではなく、社会性・普遍性のある独立した小説である。

『個人的な体験』は、大江がサルトルの思想に依拠しながら、サルトルが意識の構造上の仕組みから不可能とした、自己欺瞞からの覚醒を導く「赤んぼう」という救済者を生み出したところに独自性がある。従来は初期に支配的な影響を受けたとされて独自性が明確ではなかったが、本検証の結果、大江は、サルトルの思想の「自由」と「責任」についての捉え方という点は受容しているが、主観のみの世界観、他者理解の不可能性、人間が自己欺瞞から脱け出すことは不可能であるという悲観的な人間観は受容していないことが明らかとなった。このような意図的な選別をおこなった受容からは、大江文学全体の主題が、従来言及されているような年代ごとに区切って論じるものではなく、出発期から一貫している可能性を見い出せる。

『個人的な体験』は、『救済』の文学といわれる大江文学の実質的な出発を示す小説であり、大江文学の分水嶺となる中核をなす小説である。また放射能問題を抱える現代と重なるような状況下の人々の悲観的思考を変えることによって、現実社会の在り様を改善するための〈希望〉を提示した寓意小説であるとも言える。そこに本小説の普遍性が認められる。

注(1) ファコヘールの生態については、フレッド・フック他編『地球動物図鑑』(新樹社、二〇〇六・三)を参照。

(2) サルトル著／松浪新三郎訳『存在と無Ⅲ』(筑摩書房、二〇〇八・二)に拠れば、サルトルの考える「自由」とは、人生の全ての出来事、通常であれば自身が主体的に選択出来ないと思われる不条理ですら、自らの「自由」意志によって選択したのだと捉える。このように「自由」を定義するために、「責任」についても極めて厳格であり、あらゆる不条理を自らの「自由」意志によって選択した結果の自己責任と定めている。したがって、戦争犠牲者においてすら、その死の全責任は彼らにあると述べている。

(3) (2)にあげた『存在と無Ⅲ』原註に、「われわれはかかる存在回復本来性と名づけるのであるが、これについて記述することは、まだ早すぎる」と記されているが、具体的な方法は一切書かれていない。

(4) サルトル著／松浪新三郎訳『存在と無Ⅰ』(筑摩書房、二〇〇七・一)を参照。尚サルトルにおける自己欺瞞と知性との関係性や、初期の主題の独自性については、拙稿「大江健三郎『他人の足』論——「ばく」の〈意識〉をめぐる』『国文目白』第48号(二〇〇九・二)に論考している。

〈附記〉本文の引用は、『個人的な体験』(新潮社、一九六四・八)に拠った。